335

保養院遺跡

（姶良郡姶良町平松）

位置と環境

遺跡は姶良町の南西部，思川の右岸と姶良カルデラの火口壁の中間部に広がる海抜８～10m程の低い沖積地に位置している。遺跡は，この比高差の中で南へ緩やかに傾斜している。遺跡の位置する沖積地は，思川によりつくられ，その時期も比較的新しく，本遺跡の形成の直前に近い時期であったと考えられる。

また，このことは周辺に存在する遺跡の内容からも窺うことができる。

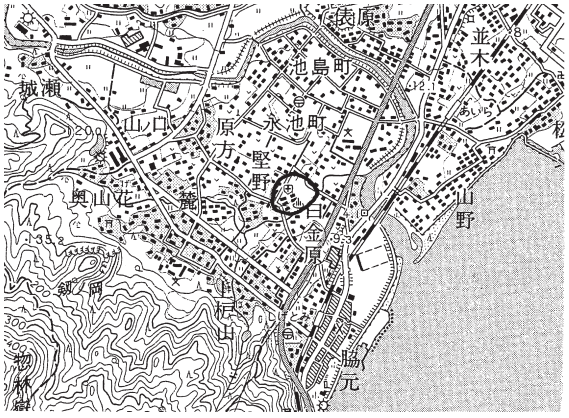
この沖積地周辺には，奈良時代から平安時代にかけて営まれた遺跡である小瀬戸遺跡，この付近一帯の古墳時代の中心的集落集落であったと考えられる萩原遺跡や古墳時代の住居跡や平安時代のＶ字状の溝などが発見された平松原遺跡などが存在している。

調査の経緯

県立鹿児島保養院を改築整備し，県立姶良病院の建設に伴って，平成元年（1989年）から３か年にかけて鹿児島県教育委員会が確認調査及び本調査を実施した。発掘調査は，確認調査の結果をもとに，改築工事により削平される場所と病棟施設等の建物が建設される場所について行った。

遺構と遺物

発掘調査では，弥生時代末から古墳時代を中心とする竪穴住居跡・土坑・溝，奈良・平安時代の溝や中世の畦跡・掘立柱建物跡等が発掘されている。



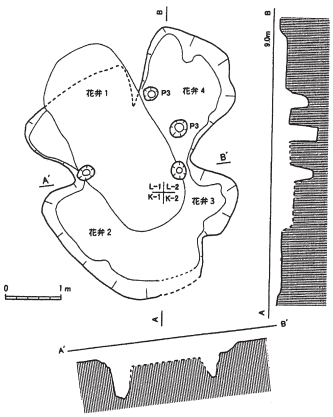
第１図　保養院遺跡の位置

・竪穴住居跡

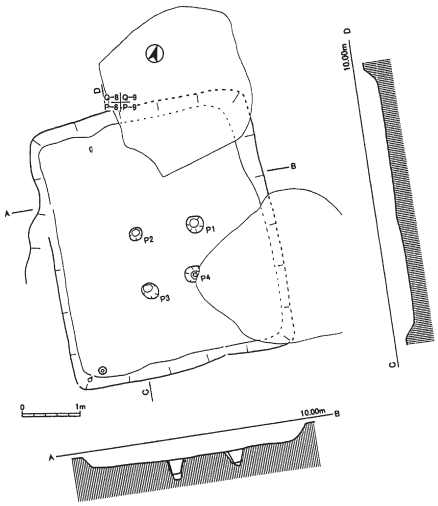
発掘調査の中心となったは，弥生時代末から古墳時代にかけての21軒にも及ぶ竪穴住居跡群である。この住居跡群は，従来南九州で一般的に発見される方形の住居跡と「日向型変形住居跡」と呼ばれる特殊な形の住居跡である。「日向型変形住居跡」は，「日向型間仕切り住居跡」，「花弁形住居跡」などとも呼ばれるもので，弥生時代中期末頃からつくられたと考えられている。そして，その分布が鹿児島県の大隅半島から宮崎県の日向市近郊までであること，その形状が花弁状であることからこのように呼ばれている。

保養院遺跡で発見された住居跡は，残存状況のよくない住居跡もあるが，住居跡内の遺物等から判断すると，日向型変形住居跡が11軒以上存在していたものと思われる。

第２図は，検出された日向型変形住居跡の中でも



第２図　日向型変形住居跡



第３図　方形の住居跡

保存状態が良好で，その形状をよくあらわしているものである。

中央部分をごみ捨ての穴で破壊されているものの花弁状の張り出しが4か所あり，張り出し部分の床は，住居跡の中央部分より一段高く，ベッド状になっていることがよくわかる。

第3図は，第2図の住居跡同様に後世に破壊された部分があるものの，残存している部分から想定すると，方形の住居跡と考えられるものである。住居跡内に残されていた土器から，古墳時代に属する住居跡であり，第2図の住居跡より新しいものと考えられる。

・土坑

住居跡のほかに多く検出された遺構としては，人工的に掘られた穴である土坑がある。

検出された土坑は，大型円形土坑と土坑群に分けられる。大型円形土坑は，直径数m程度，深さ1～2m程度のものが3基（写真1の中央），土坑群は，直径1m程度，深さが1mに満たないぐらいのものが多数集中していた(写真1の左上)。また，土坑の周辺には，完全な形に近いものを含む多量の土器が集中していた。

・遺物

検出された遺構の中や包含層からは，弥生時代の終わり頃から古墳時代にかけての土器が大量に出土している。その中でも最も出土量が多く，日常的に用いられていたと思われるものが，写真6の甕形土器，写真7の壺形土器などである。

また，写真4のように，不要になった土器の廃棄場所と思われる土器溜りからは，大量の土器片が出土している。

特徴

弥生時代から古墳時代にかけての多数の住居跡が発見されたことは，南九州における当時の集落のあり方や住居形態を知る上で，貴重な資料である。

資料の所在

出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1994「保養院遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書』11

（鶴田靜彦）

写真1　発掘された住居跡・土坑

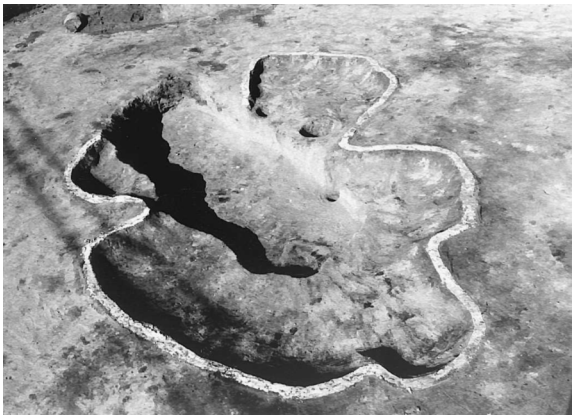


写真 2　日向型変形住居跡

写真 3　日向型変形住居跡

写真 4　すてられた大量の土器

写真 5　出土した土器

写真 6　甕形土器

写真 7　壺形土器